

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 6 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26285074

研究課題名(和文)近代日本における統計調査制度の発展に関する研究

研究課題名(英文)study on the developemnt of statistical survey system in modern Japan

研究代表者

佐藤 正広 (Sato, Masahiro)

一橋大学・経済研究所・教授

研究者番号：80178772

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,800,000円

研究成果の概要(和文)：日本が近代国家を形成する過程で、統治する国土や人間を把握するために不可欠の手段として導入した統計調査について、これが同時代人である統計調査主体によってどう理解され、運用されたか。また、同様に同時代人である調査対象によってどう理解され回答されたかという問題に関して、基礎資料である行政文書や、統計局長経験者の手書き資料などに遡って解明した。研究成果は多様であるが、わが国の統計資料が一定の信頼性を持つようになるのは明治22年に町村制が施行された後のことであること、また、近代日本に移植された統計学は、ドイツ国状学から確率論に基づいた統計学になる中間の段階にあったことなどが明らかにされた。

研究成果の概要(英文)：The statistical survey system was introduced to Japan in the early Meiji era, with which the state could obtain information about nation and social and natural circumstances under its control. The aim of this project is to explore following two points. Firstly, how did the government officials recognise and use the statistical surveys? Secondly, how did the ordinary people understand the surveys and answer the questionnaires? Answering these questions, this project successfully revealed that the statistical data became reliable after 1889 in Japan.

研究分野：統計調査制度史

キーワード：統計調査 近代国家 統計学史 統計資料論

1. 研究開始当初の背景

日本における統計調査は、明治初年に中央集権国家が成立するとともに、西欧から導入された。われわれが今日利用可能な歴史的統計データはその産物である。しかし、この統計データがどのような環境で作成されたか、従ってデータとして利用する際にどのような偏りが予想されるかについては、重要な問題であるにもかかわらず、これまでほとんど注目されてこなかった。また、戦前の統計資料(帝国統計年鑑などの公的統計を中心とする)では、統計数値のみ掲載されており、調査の定義や方法などについては、まったくといってよいほど情報を欠いている。本研究は、統計データをめぐるこのような状況を背景として計画された。

2. 研究の目的

上記のような背景を前提として、本研究の目的は、(1)戦前期日本における統計調査システムがどのように設計されたか(調査項目の定義、調査の方法、調査の主体的担い手の養成、調査のバックボーンをなす統計学の実態など)、(2)調査を実施する主体である官公庁の当事者たちは、どのような統計学的背景をもっていたのか、(3)官公庁の統計編成の当事者たちは、どのような意図とどのような具体的方法(調査は個票か、表式調査か、調査組織はどのようになっていたかなど)を前提に調査の設計を行ったのか、(4)さらに調査対象となる人々は、統計調査に対して、これをどのように理解して回答したのか(たとえば、生産や流通に関する調査が徴税の材料に使われるという憶測から調査協力を忌避することはありがちな現象である)と言うことを明らかにすることである。

以上のことを通じて、戦前日本の統計資料・データについて、その信頼度や偏りを具体的に明らかにするとともに、逆にそうした統計システムを通じて垣間見られる当時の日本社会の構造はどのようなものであったかということ明らかにすることが本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究は、中央、地方の官公庁の行政資料、たとえば中央官庁の公文書や、県、市町村レベルの行政文書、あるいは、川島孝彦元統計局長の遺した統計調査に関する膨大なアーカイブ、柳澤統計研究所の所報など、各種の一次資料から、明治期から昭和戦前期に至る時期の統計編成業務の実態を帰納的に明らかにすることを通じて行われる。

ここで言う統計編成業務の実態とは、統計調査の設計(どのような形で統計データをうるかという方法の問題)の具体的あり方、調査実施のプロセス(設計された調査をどのような組織で、どのような素養を持った人々が実際に担ったか)、調査の結果がどのような発想に基づいて利用されたかなどの問題を含

んでいる。

4. 研究成果

(1)幕末から維新时期にかけて、統計調査は国家にとっても全く新しい業務であり、どこからどのように手をつければよいかかわらず、全く手探りの状態からはじまった。特に明治維新後 20 年ほどの間は、全国における法制度も、行政組織も、経済上の諸慣行なども統一されておらず、全国一律に統計調査ができる環境ではなかった。明治期において統計調査の結果がある程度信頼出来るようになるのは、明治 22 年に町村制が施行され、全国の末端自治体の業務が統一されて以降であることがほぼ明らかになった。しかし、この後の統計データの精度についても、市町村などの末端自治体の統計担当者が非常に多忙であり、分散型統計調査システムの弊害である重複調査等が多かったため、戦後と比較すると、その信頼度は低いことがわかった。

(2)明治期に統計調査制度を導入した人々が依拠した統計学は、ドイツの国状学から確率論に基づいた立論へと移行する過渡期にある統計学であったことが判明した。この結果、統計調査は全数調査を以て最も正確なものとされた(今日でも官庁統計においてはそのように考えられている)。しかしこの状況は、1930 年代になると急速に変化し、いわゆる「統計学の数学化」と呼ばれるような状況を呈してくる。たとえば、国勢調査の個票を無作為抽出(系統抽出)して、母集団の属性を推計するような研究が、亀田豊治郎などの手によって行われるようになった。この点で、戦後の数理統計学の発展につながるような動きが、既に戦前日本においてもはじまっていたことが判明した。

(3)日本の統計調査システムは極端な分散型(各官庁がその管轄下にある事項を勝手に調査するシステム)で知られるが、このような状況をもたらした原因として、明治初期の各官庁に強い縄張り意識があり、統計学者たちが集中型の調査システムを構築しようとしても、力関係によってそれができなかった事情があることが判明した。明治初年、日本の統計システムを編成するにあたり、杉亨二等は「政表会議」という、今日で言えば統計委員会に相当する会議を開催して、各官庁の統計調査の内容を細かくチェックしようとしたが、この企ては各官庁の反発を招き、結果的には失敗に終わったのである。その典型を、大蔵省統計寮と太政官政表課との間の確執に見ることができる。この過程については、本研究の最後の時期に判明したため、まだ研究論文等の形で発表するに至っていないが、近々学会報告をし、論文として発表することになっている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 9 件)

佐藤正広「川島孝彦—人物像と統計—」『ディスカッションペーパーNo.3』、査読なし、総務省統計研究研修所、2017年、1-37ページ

佐藤正広「近代統計発達史文庫解題」『統計資料シリーズ No.73 近代統計発達史文庫目録』、査読なし、2017年、3-9ページ

佐藤正広「両大戦間期における政府統計の信頼性—統計編成業務の諸問題とデータの精度について—」『経済研究』、査読あり、第68巻第1号、2017年、46-63ページ

尾関学「大正初期の山梨県町村是による『村民所得』の推計」『経済史研究』、査読なし、第19号、41-58ページ、2016年

山口幸三「副標本による標本誤差の計測」『統計学』、査読あり、第111号、経済統計学会、17-26ページ、2016年

上藤一郎「高野岩三郎と日本の統計学(1)」『静岡大学経済研究』、査読なし、第20巻第4号、55-70ページ、2015年

森博美「明治31年内閣訓令第1号乙号と調査票情報」『オケージョナルペーパー 42』、査読なし、法政大学日本統計研究所、1-26ページ、2014年

森博美「戦前期統計雑誌に見る町村是調査の評価について」『ディスカッションペーパー 6』、査読なし、法政大学日本統計研究所、1-11ページ、2014年

森博美「昭和27年住民登録調査とその特徴について」『ディスカッションペーパー 7』、査読なし、法政大学日本統計研究所、1-18ページ、2014年

〔学会発表〕(計11件)

佐藤正広「川島孝彦—その人物像と統計—」総務省統計研究研修所(招待講演)、東京都新宿区、2017年3月3日

佐藤正広「両大戦間期における政府統計の正確性」一橋大学経済研究所定例研究会、東京都国立市、2016年11月30日

上藤一郎「戦前期における日本の数理統計学と公的統計」経済統計学会全国研究大会、鹿児島県鹿児島市、2016年9月13日

小林良行「統計家としての柳沢保恵」経済統計学会全国研究大会、鹿児島県鹿児島市、2016年9月13日

山口幸三「戦前と戦後の失業に関する統計調査」経済統計学会全国研究大会、鹿児島県

鹿児島市、2016年9月13日

佐藤正広「大正期の統計調査環境について」経済統計学会全国研究大会、北海道札幌市、2015年9月12日

上藤一郎「第一回国勢調査と日本の統計学—亀田豊治郎による抽出結果の学説史的意義—」経済統計学会全国研究大会、北海道札幌市、2015年9月12日

尾関学「家の経済と国の経済—汐見三郎の研究から—」経済統計学会全国研究大会、北海道札幌市、2015年9月12日

森博美「再論—業務統計の作成論理とその構造—」経済統計学会関東支部研究会、東京都豊島区、2015年8月8日

佐藤正広「第一回国勢調査の調査環境—今日との比較で何がわかるか—」総務省統計研究研修所(招待講演)、東京都新宿区、2015年3月10日

上藤一郎「藤沢利喜太郎と統計学」経済統計学会関東支部大会(招待講演)、東京都豊島区、2015年1月17日

〔図書〕(計2件)

佐藤正広(2015)『国勢調査—日本社会の百年—』岩波書店、256ページ

尾関学(2015)『戦前日本の農村と農家の消費分析とその可能性—経済史と統計調査史との資料論的アプローチ—』岡山大学経済学部、197ページ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 正広 (SATO, Masahiro)
一橋大学・経済研究所・教授
研究者番号: 80178772

(2) 連携研究者

森 博美 (MORI, Hiromi)
法政大学・日本統計研究所・教授
研究者番号: 40105854

上藤 一郎 (UWAFUJI, Ichiro)
静岡大学・人文学部・教授
研究者番号: 00281494

尾関 学 (OZEKI, Manabu)
岡山大学・大学院社会文化科学研究科・教授
研究者番号: 90345455

(3) 研究協力者

小林 良行 (KOBAYASHI, Yoshiyuki)

総務省・統計研究研修所・教授
研究者番号:80553643

山口 幸三 (YAMAGUCHI, Kozo)
京都大学・大学院農学研究科・准教授
研究者番号:10436751